

2. 長浜赤十字救護班第2班 (平成23年3月15日～18日)

医師：高萩亮宏(班長)、川口誠司
看護師長：中村忠之
看護師：西村よしえ、北野裕司
主事：中西康夫、丸山直樹



【活動報告】

3月14日

18:00頃 救護班第3班構成員召集

3月15日

16:00 災害対策本部に集合
19:35 長浜赤十字病院出発(運転手:中西・丸山)
19:48 長浜 IC
20:00 しずヶ岳 SA 着(夕食)
20:45 しずヶ岳 SA 発
21:38 [中村医師より連絡]「福島県支部からの報告事項の連絡:高濃度の放射線を検出した。住民に対して、20km 圏内の退避、30km 圏内の屋内待機の指示あり。当救護班は50km 圏内には入らないことを確認」
22:13 尼御前 SA 着
22:32 給油(制限なし)
22:42 尼御前 SA 発(運転手:北野・川口に交代)
静岡にて震度6強の地震発生の情報をテレビおよびラジオにて得る

3月16日

00:25 有磯海 SA 着
01:14 有磯海 SA 発(運転手:北野・西村に交代)
01:37 新潟県に入る。
01:42 この頃より降雪あり。気温-1度
02:17 名立谷浜 SA 着
02:21 名立谷浜 SA 発(運転手:高萩・中村に交代)
04:15 黒崎 PA 着
04:25 給油(制限なし)
04:36 黒崎 PA 発(運転手:中西・丸山に交代)
04:46 新潟中央 IC
05:20 新潟県支部着(県支部3階にて仮眠:水道・電気・トイレ・通信問題なし)
06:50 起床、出発準備(放射線量測定:0.14 μ SV/h)
07:27 新潟県支部発(運転手:中西・丸山)
08:00 新潟中央 IC(コンビニにて朝食を購入し車中にて食べる)
08:25 五泉 PA 着(放射線量測定:0.08 μ SV/h)
08:35 五泉 PA 発
08:44 阿賀野 SAにて検問(緊急車両は通過のみ)
08:57 津川 IC 通過(ここより一般車は通行止め)(トンネル内の照明はほとんどついていない走行注意)
09:09 福島県に入る
09:48 磐梯山 SA 着(放射線量測定:1.15 μ SV/h)(水道・電気・トイレ・通信問題なし)(売店あり)
給油(上限2000円までの制限あり)
10:23 磐梯山 SA 発
段差あり工事中(一車線規制あり80.6 キロボ スト付近)
10:43 五百川 PA 着(放射線量測定:5.1~5.2 μ SV/h)
11:15 五百川 PA 発
11:22 車内にて放射線量を随時測定
11:50 福島西 IC
12:00 福島県支部着
福島県支部事務局長に挨拶後、担当課長より現状説明と救護要請を受ける
山形県支部救護班が救護所より戻ってきたため、医師(高萩・川口)が報告を受ける。
救護所の室外では放射線量が90 μ SV/h、室内2 μ SV/hであることを判明した。
当院の災害対策本部と協議した結果、救護活動ははせずに新潟県支部に戻ることを決定した。

- 15:05 福島県支部事務局長に挨拶後、福島西 IC より東北自動車道に入り郡山 JCT を経由し、磐越自動車道にて新潟中央 IC を降り新潟県支部へ到着した。（運転手：中西・丸山）
- 18:55 新潟県支部に到着
資器材を降ろして確認後、両車両に積み込み、新潟県支部駐車場に駐車し、鍵を預けた。
タクシーにて新潟駅近くのアパホテルに向かった。
アパホテルに到着（新潟駅まで約1.5km あり徒歩では30分を要した）
電車の切符はホテルチェックイン後、新潟駅まで行き購入した。混雑なく購入できた。）
- 20:10 チェックイン後、ホテル1階の和食店にて夕食をとった。

3月17日

- 07:00 ホテルをチェックアウトし、路線バスにて新潟駅まで向かった。（5分間隔で運行 200円）
- 07:25 新潟駅着
- 07:55 特急北越2号（金沢行）に乗車（車両が古いため快適でない。車内の空調もよくない）
- 11:00 指定席・自由席ともに空席あり。車中販売はないため乗車前に朝食購入した。
- 11:10 5分遅れで富山駅に到着。
- 13:44 到着ホームにしらさぎ8号（名古屋行）があり、弁当等を購入する時間はあった。
- 13:50 富山駅発車。（シートおよび空調もよく快適に乗車できる）
- 14:20 米原駅着
- 14:40 米原駅西口より当院の車両に乗り込む
長浜赤十字病院に到着し、院長はじめ幹部、災害対策本部員に活動状況報告を行う（講堂）

【活動報告】

3月14日、第3班の構成員が決定し資器材の準備等を行った後、ミーティングにて集合時間、派遣先（宮城県方面）を確認後帰宅する。

3月15日昼頃に病院より、派遣先変更（福島県方面）の連絡と参加への意思確認があり、全員承諾する。16時に災害対策本部に集合し、資器材準備、派遣先の状況確認等を行いながら、本社、県支部の決定を待つ。

新潟県を経由、福島県支部に向かうことが決定したため、18時頃より車両2台（高規格救急車、ワゴン）に資器材の積み込みを行う。通信機材の使用方法について説明を受けた後、19時35分に長浜赤十字病院を出発した。

北陸自動車道を使用し、適宜休憩を取りながら新潟県支部に向かった。道中は、運転を交代しながらテレビ、ラジオ、携帯電話等から現地の情報を得ていった。天候は、新潟県に入る頃より降雪があったが積雪はなく運行には問題はなかった。新潟県支部には5時20分に到着し、7時まで仮眠し福島県支部に向かった。

磐越自動車道を使用し、福島県支部に向かった。降雪はありスピードはあまり出せないところもあったが、運行には問題ない状態であった。（チェーン規制あり）阿賀野川 SA にて警察の検問があるが緊急車両は停止することなく通過できた。津川 IC からは緊急車両のみ通行可能となり、トンネル内の照明は節電のため殆どついていない。

磐梯山 SA にて、放射線量を測定したところ1.15 μ Sv/h を検出した（自衛隊の測定値は2.0 μ Sv/h 以上を検出した様子）。五百川 PA まで進み測定したところ5.1 μ Sv/h を検出したため、車両の空調を止め福島県支部へ急いで向かうこととなった。

12時に福島県支部へ到着した。事務局長に挨拶したのち担当課長より現状報告と救護要請があった。山形県支部救護班が救護活動を終え福島県支部に帰ってきたため、医師2名（高萩、川口）が活動状況等を確認した。福島工業高校にて活動していたが、室外にて90 μ Sv/h、室内2.0 μ Sv/h を検出していたため、午前中のみ活動で戻ってきたという内容であった。それらの情報を当院の災害対策本部に報告し、検討した結果、救護活動を行わず新潟県支部に引き返すことになり、15時05分福島県支部を出発した。

新潟県支部に向かう途中の SA・PA にて放射線量の測定を実施しながら18時55分に新潟県支部に到着した（測定値は別紙参照）。到着後、車両の資器材を整理した後、タクシーにて20時10分にホテルに到着した。

3月17日7時55分新潟駅発の特急北越2号（金沢行）に乗車、富山駅で特急しらさぎ8号（名古屋行）に乗り換え、13時44分に米原駅に到着し当院に戻った。

【次の救護班への連絡事項】

※放射線量測定について

出発前に放射線科藤原係長より放射線量測定器（ガイガーカウンターとポータブル測定器）の使用方法について説明を受ける。今回の救護班の基準値として定点値 20 μ Sv/h、積算値 1000 μ Sv/h とすることを確認した。基準値を超えた場合はその場より撤退すること、50km 圏内には入らないこと



も合わせて確認した。

実際に測定を開始したのは、福島県に入った磐梯山 SA であり福島第一原発との距離が短くなるとともに検出される放射線量は高くなっていった。

放射線量が高くなることと比例し、救護班の構成員の不安が増大し、福島県市内にて $90 \mu\text{Sv/h}$ を検出されたことを知ると不安がピークに達した。不安を増大させた理由として、福島第一原発の状況が不安定であったこと、情報が入手できないこと、救護班構成員の放射線量に対する知識が不足していたこと（救護班員として放射線量の説明をほとんど受けていない）などが考えられる。さらに、当院の救護班以外は撤退していることも不安を増大させた要因である。

しかし、測定器を持参し放射線量が随時測定できたことは、構成員の被曝量を実測できたため最終的に安心材料とできたことは事実であり、現地の状況が安定するまでは救護班は持参することを勧めます。

※その他気づいたこと

- * 現地は物資が不足しているため、救護班の資材（食料含む）は全てこちらから持参するほうが良い。新潟市内のコンビニでもパンやおにぎりもない状態で、福島県内についてはコンビニもほとんど閉まっている。
- * ガソリンについても、福島県内では給油制限がある。（緊急車両でも例外ではない）今回は、ほとんどが高速道路で給油したためガソリンスタンドで並ぶことはなかったが、今後の状況は不明。
- * 車両 2 台には、多くの資器材を積んでいるため、あまり速度は出ない、さらに燃費は良くないため目的地までの距離と航行可能な距離を把握しておく必要がある。ちなみに両車両ともガソリンタンクは約 60ℓ、燃費は 5km/ℓ である。予備として、ガソリン 100ℓ、軽油 60ℓ を車内に携行している。
- * 今回の救護については、現地が遠方なため走行距離が長いこと、主事のみが運転することはかなりの負担である。構成員が随時交代をしていき疲労を最小限にしていけることが必要。（道路事情は、福島県内のみ段差があるがそれも解消してきている。新潟までは問題がない）
- * 記録については、主事のみが行うのではなく、全員が記録をしておく。デジカメ、やビデオカメラ等による記録も有効である。小さなことでも記録する。
- * 会計については、主事の一人が担当する。
- * 現地、車両内は乾燥しているためマスクを常時着用しておくこと。水分をこまめに摂取する、のど飴をなめるなど乾燥対策が必要。肌も乾燥するのでリップや乳液も必要。
- * 寒さ対策として、手袋、ネックウォーマー、カイロ等は準備したほうが良い。
- * 一番大切なことは、構成員の安全確保と構成員の中で意見交換を行うことだと思います。

救護活動を振り返って

看護係長 北野裕司

私たちは実際の救護は行ってない。福島県支部まで放射線量を測定しながら移動し、線量の値から撤退を判断した。救護班の安全確認、確保に関して感じる考えることが多く、それらを中心に述べる。

おそらく放射能のリスクがあった初めての救護班派遣ケースだと思う。

福島に派遣と聞いた際には原発の一部が崩壊している状態であり、30 km 圏内は避難地域に指定されていた。そのため、50 km 圏内である福島市では放射能を浴びるリスクが高いと考え、行っても良いのかと迷った。行くと判断したのも、他者が選ばれてしまうのではないかと、私への評価が落ちてしまうという感情があった。

病院の説明で被曝量は少量であることや、安定ヨウ素剤の内服で甲状腺の防御ができると理屈ではわかっていたが、さらなる原発の悪化の可能性などを考えると不安が強かった。おそらく送り出す、病院側の不安も大きかったのではないと思う。

病院を出発する際は活気があったが、現場に近づくにつれて、車内の会話などからメンバーの不安も大きくなっていったように感じたし、私も不安だった。新潟支部に入り、仮眠を取ったことで少し緊張の緩和と体力の回復が出来たことは幸いであった。新潟から福島に入る道中では救護のことよりも、原発や放射線量のことが気になり、メンバーからも「行っても大丈夫か」といった発言が聞かれた。磐梯山付近にて原発の爆発と白煙が上がったニュースを

見て、緊張が一段と大きくなった。本部に指示を仰ぐと、とりあえず福島県支部に向かえとのことであった。メンバーで今後の行動を話し合い、線量を測定しながら向かうことを決定したが、緊張度は非常に高かった。私は、これ以上進んで現地に到着しても、放射線が気になり救護活動を行えないのではないかと感じるようになった。

支部に着き支部長の話を聞いたところ、是非福島で救護活動を行なって欲しいと半ば懇願される形で救護の依頼を受けた。出発前の決定事項であった撤退基準 $20 \mu\text{Sv/h}$ を観測していなかったが、支部の活動には明らかな人員の不足が見て取れたため、放射能のリスクを背負って救護を行なうかメンバーでも意見が分かれた。本部からの指示でも残って線量の低い場所で救護を行えとの指示（いろいろ指揮命令系統にも問題があったようであるが・・・）であった。またその指示を聞いて、私たちは不信感を抱いたりもした。その時、仙台から派遣されていた救護班が放射線量を理由に撤退する判断を下した。班員はとにかく放射能の影響が怖かったと話をされた。仙台が徹底することで福島県内に展開している救護班は私達だけとなることとなり、この時点で班長は撤退することを決定した。撤退の申し出で行なったところ、放射能スクリーニングを行なった救護所に行ってくれないかと提案された。しかしメンバーの不安、救護所に入って対象者を見てしまうと仮に事態が悪化した際に撤退する判断ができない、この 2 点から救護は行わず撤退することとなった。当病院も、福島県本部もそれを了承した。班長であった高萩医師の決定に対するストレスは非常に高かったと思うし、勇気のいる判断だったと思う。撤退を決め帰路に着いた際には、安心したのが正直なところ

ろではあったが、線量の高い場所で生活・救護する人々や赤十字の人間として判断が正しかたかを考えると複雑な思いであった。

帰路においては、本部の指示もあり次の班のためにと高速の各 PA・SA で線量を測定しながら撤退した。メンバーの衣類などからは大気と同程度の線量しか測定されなかったため、衣類の処分はしなかった。新潟につき食事をしながらメンバーで今回の活動について語りあった。意見としては、不安がつよかった、いきたくなかった、撤退を決められたこのメンバーでよかった、放射線下での救護班活動はどうか、他の場所なら活動できたなど話をして気持ちを落ち着かせることができ病院に帰ることができた。正直、達成感はなく帰れたことに安心した。

しかし帰宅してから気分が落ち込んだり、のんきな TV 番組や家族に腹をたてたり自分自身は不安定であった。食料の確保なども少し行ってしまった。今でも、活動に関してしてことが頭をよぎることがある。

救護の際に安全は確実なものではないが、放射能に関しては特に不安が大きくなる。

ゆえに放射線などを考慮して活動しなければいけない時は、県や病院といった単位の判断で活動すべきではないと考える。安全性と体制の整った状態で、多くの班が情報を共有しながら活動できるようにしてから派遣するべきと考える。

また赤十字は今後起こりうる可能性がでてしまった、原子力・放射線災害についての指針を出すべきであると考え

救護活動を振り返って

医事統計係長 丸山直樹

平成 23 年 3 月 15 日 19 時 30 分。多くの病院職員の見送りのなか、急遽行き先の変更になった日本赤十字福島県支部に向け 2 台の救急車両は出発した。福島第一原発の事故を受けての出発。その一時間前には救護班全員が“被曝防止用のヨウ素カリウム”を飲み“放射線量測定装置ガイガーカウンター”の使い方を確認した。福島原発がどんな状況であるかはテレビで繰り返し流れていてみんな知っている。僕たちを見送っていただいた人たちも複雑な心境であったと思う。

翌朝、仮眠をとっていた赤十字新潟県支部のテレビで福島第一原発 2 号機から煙が上がっている映像をみた。班員の不安が広がる。そんな不安のなか、赤十字新潟県支部を出発する前にいよいよ銀色のケースに入ったガイガーカウンターを箱から取り出し、班員の顔、手、胸、喉などを順番に測定した。

恐怖を抑えながら赤十字新潟県支部をあとに福島県支部を目指し磐越自動車道を走る。高速道路も途中からは緊急車両のみが通行可能となり、トンネル内の照明は節電のため殆どついていない状況。随時パーキングエリアで地図を広げ、あらかじめ放射状に引いてある福島第一原発からの距離を確認、外気の放射線量を測定し記録する。「現在原発から 70 キロの地点」「60 キロ地点」「50 キロ地点」「現在原発に最も接近」。ガイガーカウンターの値も新潟で測定した時は 0.09 μ シーベルトしか示さなかったが、嘘のように徐々に上がっていく。車外は雪が舞っていたが気付けば吹雪いている。風の向きを気にしても今更どうしようも

ない。事前の話で放射線量が 20 μ シーベルトを超えれば即時撤退を命じられていた。五百川 PA まで進み測定したところ 5.1 μ Sv/h を検出した。測定の際のガイガーカウンターの警告音がものすごい。恐怖感で押しつぶされそうになるが 20 μ シーベルトは超えていない。撤退はない。(20 マイクロシーベルト) (20 マイクロシーベルト) その数字が頭で何度もぐるぐる回る。

福島県支部に到着し支部長に到着の報告をする。立派な建物の中は薄暗い。支部長室では「本当によく来ていただいた」と長浜赤十字病院救護班の到着を心から感謝され最敬礼で迎えていただいた。応接室のソファーに腰掛けて震災と救護所の現状を伺う。水・電気・ガスの止まった状況。加えて、強い余震が続けて起こる恐怖。そして目に見えない高い放射線量。支部の方は何とか救護班に活動してほしいと懇願される。

そんな中、日赤山形県支部から一足早く救護に来ていた救護班が午前中の活動をもって撤退すると情報が入った。やはり放射線量の高さが問題だった。その時点で福島に入っている救護班は長浜赤十字病院だけである。残って活動するか撤退するか。決断を迫られる。今思うと班員はそれぞれ自分自身の答えを持っていたと思う。でも「感情」をむき出しに話すことが出来ない緊迫感。「感情」で話し出すとみんながばらばらになる気がした。

ここで撤退することは福島県支部の方、福島県の方を裏切る非道な選択になると思った。しかし放射能汚染の中で活動する訓練を受けていない救護班が果たして救護班といえるのか。いったん救護所に行けば患者を置いて帰る決断を下せなくなるかもしれない。いろんな意見が出た。

話し合ったうえ、結局撤退することを決断した。苦渋の決断。撤退の意向を支部長に伝えた時のお言葉は今も忘れません「わかりました。遠方までお越し頂きありがとうございます。」その言葉を耳に残して福島県を後にした。福島県支部の皆さん、救護することが出来なかった福島県の人達に対して本当に申し訳ない思いでいっぱいであった。



福島県から引き上げた夜、新潟で食事を共にとりながら班員全員が「感情」を交えて話し合った。福島県で考えたこと。福島県に置いて来てしまった感情。その夜はみんなと話して楽になった。救われた気がした。救護班として人を救う達成感はもてなかったが、撤退という一つの答えを全員で導けたぎりぎりの満足感を共有することが出来た。でもなぜか涙が溢れてきた。人生で最も長い一日だった。

すばらしい決断をしたメンバーの一人であったことを本当にうれしく思います。人間としていい経験が出来ました。被災地の一日も早い復興を祈念いたします。